

数值計算

大阪大学基礎工学部

永原正章

2012年6月7日(5限)

[変更] 休講と補講のお知らせ☆☆☆

下記の3回休講します.

- 6月14日(木) (この日は,補講もありません)
- 6月21日(木)
- 7月12日(木)

講義室の変更および補講:

- 7月5日(木) → 5限 (B102)・6限 (B102)
- 7月26日(木) → 5限 (B102)・6限 (B102)

連立線形方程式

■ N 変数の連立線形方程式

$$a_{11}x_1 + a_{12}x_2 + \cdots + a_{1N}x_N = b_1$$

$$a_{21}x_1 + a_{22}x_2 + \cdots + a_{2N}x_N = b_2$$

$$\vdots$$

$$a_{N1}x_1 + a_{N2}x_2 + \cdots + a_{NN}x_N = b_N$$

■ ベクトル表現

$$Ax = b, \quad A \in \mathbb{R}^{N \times N}, \quad x \in \mathbb{R}^N, \quad b \in \mathbb{R}^N.$$

連立線形方程式

- $Ax = b$
- 行列 A は**正則**と仮定する.
- 厳密解

$$x^* = A^{-1}b$$

- 変数の数 N が有限なら, 厳密解も**有限回の四則演算**で求まる.
たとえば, Gauss の消去法.

連立線形方程式

- Gaussの消去法: 計算量 $\propto N^3$.
 - サイズNが10倍になれば, 計算量は1000倍となる.
- 原理的には厳密解は求まるが, 非常に計算時間がかかる場合, 反復法により近似解を求めたほうが良い場合が多い.

Gauss消去法の計算時間

- $N = 10000$ のとき, Gaussの消去法を使うと,
 $N^3 = 10^{12}$ 回の四則演算が必要.
- $100G = 10^{11}$ FLOPSのコンピュータ(1秒間に1000億回の浮動小数点演算ができるコンピュータ)を使って計算.

- 計算時間は

$$\frac{10^{12}}{10^{11}} = 10\text{秒}$$

- $N = 100000$ (変数が10倍)のときは,
 $N^3 = 10^{15}$ 回の四則演算が必要.
- 同じコンピュータを使うとすると, 計算時間は

$$\frac{10^{15}}{10^{11}} = 10000\text{秒} \approx 2\text{時間 } 47\text{分} \quad (\text{計算時間は1000倍})$$

線形方程式に対する反復法

- 線形方程式

$$Ax = b$$

- 反復法

$$x[n+1] = Mx[n] + v, \quad n = 0, 1, 2, \dots$$

- 行列 $M \in \mathbb{R}^{N \times N}$ とベクトル $v \in \mathbb{R}^N$ は

$$x = Mx + v = \phi(x)$$

がもとの方程式 $Ax = b$ と等価になるように選ぶ.

線形連立方程式の例

- 次の連立方程式を考える.

$$x_1 + 2x_2 + 3x_3 = 1$$

$$4x_1 + 5x_2 + 6x_3 = 2$$

$$7x_1 + 8x_2 + 10x_3 = 4$$

- まず,方程式の対角成分だけを左辺に残し,残りを右辺に移項する.

$$x_1 = -2x_2 - 3x_3 + 1$$

$$5x_2 = -4x_1 - 6x_3 + 2$$

$$10x_3 = -7x_1 - 8x_2 + 4$$

線形連立方程式の例 (Jacobi法)

- 次の方程式が得られる.

$$x_1 = -2x_2 - 3x_3 + 1$$

$$x_2 = -\frac{4}{5}x_1 - \frac{6}{5}x_3 + \frac{2}{5}$$

$$x_3 = -\frac{7}{10}x_1 - \frac{8}{10}x_2 + \frac{4}{10}$$

- これより, 次の反復法を得る (Jacobi法).

$$x_1[n+1] = -2x_2[n] - 3x_3[n] + 1$$

$$x_2[n+1] = -\frac{4}{5}x_1[n] - \frac{6}{5}x_3[n] + \frac{2}{5}$$

$$x_3[n+1] = -\frac{7}{10}x_1[n] - \frac{8}{10}x_2[n] + \frac{4}{10}$$

線形連立方程式の例 (Jacobi法)

- Jacobi法 ($n = 0, 1, 2, \dots$)

$$x_1[n+1] = -2x_2[n] - 3x_3[n] + 1$$

$$x_2[n+1] = -\frac{4}{5}x_1[n] - \frac{6}{5}x_3[n] + \frac{2}{5}$$

$$x_3[n+1] = -\frac{7}{10}x_1[n] - \frac{8}{10}x_2[n] + \frac{4}{10}$$

- $x_2[n+1]$ を計算するのに $x_1[n]$ ではなく, $x_1[n+1]$ を使用する
- $x_3[n+1]$ を計算するのに $x_1[n]$, $x_2[n]$ ではなく, $x_1[n+1]$, $x_2[n+1]$ を使用する

線形連立方程式の例 (Gauss-Seidel法)

■ Gauss-Seidel法 ($n = 0, 1, 2, \dots$)

$$x_1[n+1] = -2x_2[n] - 3x_3[n] + 1$$

$$x_2[n+1] = -\frac{4}{5}x_1[n+1] - \frac{6}{5}x_3[n] + \frac{2}{5}$$

$$x_3[n+1] = -\frac{7}{10}x_1[n+1] - \frac{8}{10}x_2[n+1] + \frac{4}{10}$$

線形方程式の反復法

- 連立方程式 $Ax = b$
- 行列 A を対角行列 D , 下三角行列 E および 上三角行列 F を用いて, $A = D + E + F$ と分解する.

$$D = \begin{bmatrix} a_{11} & 0 & \dots & 0 \\ 0 & a_{22} & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & 0 \\ 0 & \dots & 0 & a_{NN} \end{bmatrix}, \quad E = \begin{bmatrix} 0 & 0 & \dots & 0 \\ a_{21} & 0 & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & 0 \\ a_{N1} & \dots & a_{N,N-1} & 0 \end{bmatrix},$$

$$F = \begin{bmatrix} 0 & a_{12} & \dots & a_{1N} \\ 0 & 0 & \ddots & \vdots \\ \vdots & \ddots & \ddots & a_{N-1,N} \\ 0 & \dots & 0 & 0 \end{bmatrix}$$

線形方程式の反復法

$$\text{Jacobi 法 } \phi(x) = \underbrace{-D^{-1}(E + F)}_M x + \underbrace{D^{-1}b}_v$$

$$\text{Gauss-Seidel 法 } \phi(x) = \underbrace{-(D + E)^{-1}F}_M x + \underbrace{(D + E)^{-1}b}_v$$

加速緩和法

$$\phi(x) = \underbrace{(I + \omega D^{-1}E)^{-1} \left\{ (1 - \omega)I - \omega D^{-1}F \right\}}_M x + \underbrace{\omega(D + \omega E)^{-1}b}_v$$

反復法の収束性

- 方程式 $Ax = b$ に対する反復法

$$x[n + 1] = Mx[n] + v$$

- $\phi(x) = Mx + v$
- 不動点定理より, 写像 ϕ が \mathbb{R}^N における縮小写像であれば, 任意の初期ベクトル $x[0] \in \mathbb{R}^N$ に対して, 反復法は厳密解 x^* に収束.

補題: 写像 ϕ が \mathbb{R}^N における縮小写像 $\Leftrightarrow \|M\| < 1$. ただし,

$$\|M\| := \sup_{x \in \mathbb{R}^N, x \neq 0} \frac{\|Mx\|_2}{\|x\|_2} = \sqrt{\max_{1 \leq i \leq n} |\lambda_i(M^T M)|}$$

反復法が収束するための十分条件

- もし $\|M\| < 1$ ならば, 線形方程式 $x = Mx + v$ は唯一つの解 x^* を持ち, 任意の初期ベクトル $x[0] \in \mathbb{R}^N$ に対して, 反復法

$$x[n+1] = Mx[n] + v, \quad n = 0, 1, 2, \dots$$

は厳密解 x^* に収束する.

- 逆は成り立たない. すなわち, $\|M\| \geq 1$ であっても厳密解 x^* に収束する反復法は存在する.

$\|M\| \geq 1$ であっても収束する反復法

- 次の反復法を考える。ただし, $R > 1$ とする。

$$\begin{bmatrix} x_1[n+1] \\ x_2[n+1] \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & R \\ 0 & 0 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1[n] \\ x_2[n] \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} v_1 \\ v_2 \end{bmatrix}$$

- ベクトル表現

$$x[n] = \begin{bmatrix} x_1[n] \\ x_2[n] \end{bmatrix}, \quad M = \begin{bmatrix} 0 & R \\ 0 & 0 \end{bmatrix}, \quad v = \begin{bmatrix} v_1 \\ v_2 \end{bmatrix}$$

とおくと, $M^2 = M^3 = M^4 = \dots = 0$ だから,

$$x[1] = Mx[0] + v,$$

$$x[2] = Mx[1] + v = M^2x[0] + Mv + v = Mv + v,$$

$$x[3] = Mx[2] + v = M^3x[0] + M^2v + Mv + v = Mv + v,$$

$\|M\| \geq 1$ であっても収束する反復法

- 同様にして

$$x[n] = Mx[n-1] + v, \quad n = 2, 3, \dots$$

が成り立つ。すなわち, $x[n]$ は $Mx[n-1] + v$ に収束する。

- 方程式 $x = Mx + v$ の解は $Mx + v$ である。
- 一方,

$$\|M\| = \left\| \begin{bmatrix} 0 & R \\ 0 & 0 \end{bmatrix} \right\| = R > 1.$$

- $R > 1$ は任意にとれるので, 厳密解に収束する反復法で, $\|M\|$ のノルムがいくらでも大きいものが存在する。

反復法が収束するための必要十分条件

■ 線形方程式

$$x = Mx + v$$

は一意解を持つとする

■ 任意の初期ベクトル $x[0] \in \mathbb{R}^N$ に対して 反復法

$$x[n+1] = Mx[n] + v, \quad n = 0, 1, 2, \dots$$

が線形方程式 $x = Mx + v$ の厳密解 x^* に収束するための
必要十分条件は,

$$\rho(M) < 1$$

■ $\rho(M)$: 行列 M の**スペクトル半径**(固有値の絶対値の最大値)

$$\rho(M) := \max_{1 \leq i \leq N} |\lambda_i(M)|.$$

証明

■ 反復法

$$x[n + 1] = Mx[n] + v, \quad n = 0, 1, 2, \dots$$

が任意の初期ベクトル $x[0]$ に対して厳密解 x^* に収束すると仮定する.

■ このとき,

$$\begin{aligned} e[n] &= x[n] - x^* \\ &= (Mx[n - 1] + v) - (Mx^* + v) \\ &= M(x[n - 1] - x^*) \\ &= Me[n - 1] \end{aligned}$$

証明

- $e[n] = Me[n - 1]$, $n = 0, 1, 2, \dots$ より

$$e[n] = M^n e[0] = M^n (x[0] - x^*), \quad n = 0, 1, 2, \dots$$

- M の固有値を λ_i ($i = 1, 2, \dots, N$) とし, λ_i に属する M の固有ベクトルを w_i とおく ($Mw_i = \lambda_i w_i$ が成り立つ).
- 初期ベクトルを $x[0] = w_i + x^*$ ($i = 1, 2, \dots, N$) ととると,

$$\begin{aligned} e[n] &= M^n (w_i + x^* - x^*) \\ &= M^n w_i \\ &= M^{n-1} (Mw_i) \\ &= M^{n-1} (\lambda_i w_i) \\ &= \lambda_i M^{n-1} w_i = \dots = \lambda_i^n w_i \end{aligned}$$

証明

- $e[n] = \lambda_i^n w_i$ より

$$\|e[n]\| = \|\lambda_i^n w_i\| = |\lambda_i|^n \|w_i\|, \quad i = 1, 2, \dots, N$$

- 任意の $x[0] \in \mathbb{R}^N$ に対して, 反復法は厳密解 x^* に収束するので,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} e[n] = 0$$

- これより,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \|e[n]\| = \lim_{n \rightarrow \infty} |\lambda_i|^n \|w_i\| = 0, \quad i = 1, 2, \dots, N$$

- $w_i \neq 0$ であるので, **すべての $i = 1, 2, \dots, N$ で $|\lambda_i| < 1$ であるなければならない.** すなわち, $\rho(M) < 1$ である.

証明

- 逆に $\rho(M) < 1$ であると仮定する
- $1 - \rho(M) > 0$ であるので, ある実数 $\varepsilon > 0$ が存在して,

$$1 - \rho(M) > \varepsilon$$

- この ε に対して, ある行列ノルム $\|\cdot\|_\alpha$ が存在して,

$$\|M\|_\alpha \leq \rho(M) + \varepsilon < \rho(M) + 1 - \rho(M) = 1$$

- したがって, この行列ノルム $\|\cdot\|_\alpha$ を誘導するベクトルノルム $\|\cdot\|_\alpha$ のもとで, $\phi(x) = Mx + v$ は \mathbb{R}^N の縮小写像

証明

- 反復法によって生成されるベクトル列 $\{x[n]\}$ は, 任意の初期ベクトル $x[0] \in \mathbb{R}^N$ に対して, このノルムの意味で厳密解 x^* に収束

$$\lim_{n \rightarrow \infty} \|x[n] - x^*\|_{\alpha} = 0$$

- ノルムの連続性とノルムの公理($\|x\|_{\alpha} = 0$ ならば $x = 0$)より,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} x[n] = x^*$$

安定行列

- スペクトル半径が1未満,すなわち

$$\rho(M) < 1$$

となる行列を**Schur安定行列**または単に安定行列と呼ぶ.

- 次の反復法(漸化式)

$$x[n + 1] = Mx[n]$$

が任意の初期ベクトル $x[0] \in \mathbb{R}^N$ に対して,

$$\lim_{n \rightarrow \infty} x[n] = 0$$

となるための必要十分条件がMが安定行列であること.

- 線形システムの安定性と密接に関係

Jacobi 法・Gauss-Seidel 法の収束条件☆☆☆

方程式 $Ax = b$ の行列 A が**対角優位行列** ならば,

- Jacobi 法は,任意の初期ベクトルに対して厳密解に収束する.
- Gauss-Seidel 法は,任意の初期ベクトルに対して厳密解に収束する.
- **対角優位行列**とは

$$|a_{ii}| > \sum_{\substack{j=1 \\ j \neq i}}^n |a_{ij}|, \quad i = 1, 2, \dots, n$$

が成り立つ行列.

Gauss-Seidel 法の収束条件

方程式 $Ax = b$ の行列 A およびその対角成分行列 D が**正定値対称行列** ならば,

- Gauss-Seidel 法は,任意の初期ベクトルに対して厳密解に収束する.
- 対称行列 $A \in \mathbb{R}^{n \times n}$ が**正定値** であるとは, $x \neq 0$ である任意のベクトル $x \in \mathbb{R}^n$ に対して

$$x'Ax = \sum_{i,j=1}^n a_{ij}x_i x_j > 0$$

が成立ことを言う.

- A が正定値対称行列であるとき, $A > 0$ と表す.

例題1 ★★★

- 次の方程式を考える.

$$\underbrace{\begin{bmatrix} 2 & -1 & 0 \\ -1 & 3 & -1 \\ 0 & -1 & 2 \end{bmatrix}}_A \underbrace{\begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix}}_x = \underbrace{\begin{bmatrix} 1 \\ 2 \\ 3 \end{bmatrix}}_b$$

- 行列Aは対角優位行列である.なぜなら

$$|a_{11}| = 2 > 1 = |a_{12}| + |a_{13}|$$

$$|a_{22}| = 3 > 2 = |a_{21}| + |a_{23}|$$

$$|a_{33}| = 2 > 1 = |a_{31}| + |a_{32}|$$

- したがって,上の方程式 $Ax = b$ に対して,Jacobi法および Gauss-Seidel法による反復法は 任意の初期ベクトルに対して 厳密解 $x^* = A^{-1}b$ に収束する.

練習問題

次の方程式に対するJacobi 法および Gauss-Seidel 法による反復法の収束性を調べよ.

$$\begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 4 \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 1 \\ 2 \end{bmatrix}$$

解答例

■ 行列

$$A = \begin{bmatrix} 2 & 1 \\ 1 & 4 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} a_{11} & a_{12} \\ a_{21} & a_{22} \end{bmatrix}$$

に対して,

$$|a_{11}| = 2 > 1 = |a_{12}|$$

$$|a_{22}| = 4 > 1 = |a_{21}|$$

であるので, 行列Aは対角優位行列である.

- したがって, 上の方程式に対するJacobi法およびGauss-Seidel法による反復法は 任意の初期ベクトルに対して厳密解 x^* に収束する.